雨天時の訪問先

産田神社　産田神社は弥生時代からの古い神社で、伊弉冉尊（イザナミノミコト）とその子の軻遇突智神（カグツチノミコト）を祀っている。『花の窟』が伊弉冉尊の御陵に対して、産田神社は火神の軻遇突智神を生んだがために亡くなった場所として一対的な意味合いがあり、神々が生活した古郷ともいえる。古代の神社は建物がなく、ここでは『神籬（ひもろぎ）』（神の宿るところ）と呼ばれる石で囲んだ太古の祭祀台（祀り場）へしめ縄を張り神を招きました。左右の2カ所残っており、古さをものがったています。毎年1月10日の大祭の『奉飯の儀』では子供が丈夫に成長することを願って、汁かけ飯、骨付きさんま寿司、赤和え、御酒の膳いただきます。産田神社はさんま寿司発祥の地とされています。

花窟神社　日本書紀では伊弉冉尊（イザナミノミコト）と記されている。（『古事記』では伊邪那美命）
日本神話の大地母神であり、人間の寿命を司る黄泉津大神である。同時期に生まれた国之常立神、豊雲野神、宇比地邇神、須比智邇神、角杙神、活杙神、意富斗能地神、大斗乃弁神、淤母陀琉神、阿夜詞志古泥神、伊邪那岐命と並んで「神世七代」と称される。『記紀神話』では、伊弉諾尊（イザナギノミコト）と共に天津神に国造りを命じられ、大八島国（日本の国土）と大事忍男神ら３５の神々を生むが、軻遇突智尊（カグツチノミコト）を生むときに火傷を負い、それがもとで神逝る。伊奘冉尊、火神を生む時に、灼かれて神退去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗（くにひと）、此の神の魂を祭るには、花の時には亦花を以て祭る。又鼓吹幡旗を用て、歌ひ舞ひて祭る。

奥熊野代官所跡　奥熊野代官所跡は三重県の熊野市にあります。こちらには大きな黒松があり樹齢は約300年といわれています。様々な時代の木本の街を見守りつづけていたのですが、松食い虫の被害が原因で枯死してしまった為、平成11年9月に人々に惜しまれつつも切られてしまいました。街角の標識で、奥熊野代官所跡という表示があります。現在のこの地は学校に代わっており、小さな石碑が立っております。近くには熊野古道があり、熊野三山に参詣するための道として多くの人々が歩きました。

紀伊 口有馬城　慶長4年(1599年)堀内安房守氏善によって築城がはじめられたが翌慶長5年(1600年)関ヶ原合戦によって完成を見ることはなく、氏善は西軍に属して改易となった。口有馬城は海岸寺付近にあったという。辺りは宅地化していて明確な遺構は残っていないが、当時の遺構といわれる石垣が海岸寺、天理教有井分教会の南に残っている。

その他　紀伊 口有馬城、三重県立熊野古道センター、人形の家、尾鷲神社